The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞ I. ギルヒャー・ホルタイ 『68年運動 : ドイツ・西ヨーロッパ・アメリカ』
Author(s)	ペピン, ハンス J.; 大津, 俊雄
Citation	メタフュシカ. 2007, 38, p. 165-169
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11264
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【翻訳】
I. ギルヒャー・ホルタイ『68 年運動―ドイツ・西ヨーロッパ・アメリカ』

ハンスー J. ペピン（Hans J. Pepping）/ 大津俊雄

戦後のヨーロッパ文化における社会形成にとって一番重要であったターニングポイントは、68 年運動とそれが生んだ結果であった。ビーレフェルト（Bielefeld）大学とパリ大学で現代史を教えている著者イングリート・ギルヒャー・ホルタイ（Ingrid Gilcher-Holtey）は、当時から 40 年経った学生運動を分析し、西ドイツ・フランス・イタリア・アメリカの学生運動のルーツを掘り起こして、その成果を著書『Die 68er Bewegung. Deutschland – Westeuropa – USA』において明らかにした[1]。

学生運動の結果、西ドイツでその後生まれたのは、緑の党･コミューン･市民意識であった。それは「エコロジーな生活思想､地方分権での補完性原理（Subsidiarität）の思想（EU 憲章）、社会運動への市民参加の自己責任思想」へと発展して来て、現代ドイツの社会政治思想の根幹を成している。

その点日本はどうであったのか。「68 年パリの 5 月」から 40 周年を記念して、日本人が自らの学生運動とそれ以降を、ヨーロッパと対比して振り返ることも必要ではなかろうか。

この背景の中で本稿は、西欧ではベストセラーとなりながら、原文の難解さのためか邦訳されてこなかった当著書のうち主要な第 2 章の第 4 節を先ず翻訳して紹介し、溝口先生への追悼原稿とするものである。

なお当節を取り巻く各章の目次概要は以下の通りである。第 1 章では、古い左翼と新しい左翼の意識形成を説明する。第 2 章では、その理論が実践的になる発展を描写する。節の内容では、アメリカでは反ベトナム戦争が大学の抵抗運動の触媒となったこと、新しいビート音楽文化と反文化の創造が起きたこと、西ドイツとフランスでは「未解決の過去という棘」が問題となったこと、などである。第 3 章では、学生運動が社会を運動化しようとしたが、違う社会を創ってしまった点を指摘する。節の内容では、学生運動が社会・政治の現実にぶつかるうちに、運動の力には限度があることが経験されたことなどである。第 4 章では、内在する矛盾によって運動が崩壊したことを反証する。

[1] Ingrid Gilcher-Holtey: Die 68er Bewegung. Deutschland – Westeuropa – USA. München 2005.

沈黙から行動に向けて：未解決の過去という棘（とげ）

新左翼学生を支持したグループの特徴は、行動を通して啓蒙する戦略や行動を通して行う自覚の創造にあった[2]。この戦略は、第 2 次世界大戦中と敗戦直後に生まれた若者が、過去へ直接取り組んで更に挑戦したので強化された。それは、直近の過去との論争であった。こうした過去との戦いが、目覚めの段階的過程として、彼らの意識の中に浸透した。この過程を促進したのは、アルジェリア戦争（1954 ～ 62）のような事件、エルサレムでのアイヒマン裁判（1961・62）、フランクフルトでのアウシュビッツ裁判（1964/65）のような事件であった。

過去との論争は、反復する可能性のイメージを創造する作用をした。さらにこの創造は、過去の出来事から現在への政治参加の場を導き出すために貢献した。反対運動の形成におけるこの機能の意味は、確かに全ての国で同等に強かった訳ではないが、過去の棘は決してドイツ連邦共和国（当時西ドイツ）だけに影響を与えたわけではなかった。

映像の力

危険な場面をリアルに見せる抑圧の映像を反復したことで、フランスでの直近の過去を意識に呼び起こした。それはアルジェリアにおけるフランス兵の写真であったが、ユダヤ人親の子供としてヴィシー政権時代を体験した今の親世代にとっては、忘れ去った記憶が呼び覚まされた。もう克服したと信じていたことが、戻って来つつあった。

1968 年 5 月の学生運動の 3 人のスポークスマンの一人であったアラン・ガイスマール（Alain Geismar）は振り返って、ヤイヤ・オーロン（Yair Auron）に対してこう言明した。つまり「当時の学生にとっては、フランス軍の制服を着て、拷問や地域の民族抹殺に参加する危険を冒すことは、全く想像できなかった」と言うことであった。ナチスドイツと並べると確かにフランスはそこまではいかなかったが、アルジェリアのフランス軍の行動だけは、ナチスドイツ国防軍の行動と比較された。ショックを受けたフランスの若いユダヤ人は、彼らの親を問い質し、告発しはじめた。つまりファシズムに対して親の世代が十分に戦わなかったという点である。彼らが結果として引き出したことは反戦運動への参加だけでなく、むしろ多くの場合はアルジェリア解放運動への支援並びに左翼ラディカル派（gauchistische Gruppen）への注目であった。このためアルジェリア戦争は、1968 年 5 月運動への学生支持グループの活動家多数にとって、政治分野での社会化への鍵（キー）体験となった[3]。

---

[2] 翻訳の中の全ての傍点は訳者記入である。

[3] 訳者注：鍵（キー）体験は「手掛りの出来事」を意味する。

沈黙による共犯性

「貴方は沈黙している、故に貴方は共謀している」というスローガンから導かれたのは、アメリカのフリースピーチ運動へのユダヤ人メンバーの参加だけではなかった。『ポート・ヒューロン声明』において、20 世紀を特徴付ける「恐怖」の中には、もう既にガス室・強制収容所・原爆が挙げられていた。そのプログラムが要求した無関心からの脱却は、「沈黙から行動」へ移行するアピールを含んでいた。この訴えは過去への沈黙に対しては確かに小さいが、むしろ現代社会の矛盾への沈黙に対しても向けられていた。しかしそれはフランス実存主義の影響を反映しながら、過去からの教訓を現代に転換した。

サルトル（Sartre）が『存在と無』の中で書いたように、個人が自分について人生の基本構想及び自分の行動を導く目標を一旦決めたなら、昔の出来事についての討論・考慮・判断によって過去を具体に思い浮かべることが重要ではなくて、むしろ自己設計のプロセスと現在への影響にこそ重要な意味があるのである。ファシズムを普遍的条件に戻す[4]という解釈によって、実存主義が促進した過去の克服が強調された。

反復の危険

ハンス・マグヌス・エンツェンスベルガー（Hans Magnus Enzensberger）が『ドイツ本国人であることの難しさについての反省』（1964）という本で書いたように、ファシズムとはドイツ人が犯したから恐ろしいということではなくて、むしろどこにでも誰にでもあり得るから怖いのである。彼が 1964 年『メルクール』（雑誌）にハンナ・アーレント（Hannah Arendt）との公開書簡で書いたように、アウシュビッツの将来を鑑みて、その前史について考えることは彼にとって次のような意味があった。つまり「我々は先輩の罪を考えるだけでなくて、むしろ『我々自身が背負う罪』を考えることの方が重要だ。『明日の絶滅』計画は、公然と行われるだろう」というのである。アウシュビッツと広島を同一視しながら、彼は次のような危険を強調した。つまり「後世の人がヒトラーの『絶滅』の下手人裁きに目を向けている間に、自分たちの『絶滅』が準備されているのを隠蔽している」という内容である。

テオドール・アドルノ（Theodor W. Adorno）も、反復はありうるという前提から出発した。1966 年 4 月 18 日ヘッセン州放送局から放送された「アウシュビッツ後の教育」という講演で彼はアウシュビッツを「極めて強い傾向の現れ」つまり「文明過程の中にさえ野蛮を内包する傾向の現れ」として強調した。社会の基本構造が変わらないと、無実の人間の大量殺人は、違う形でいつでも繰り返す可能性がある。

---

[4] 訳者注：「一般社会を出自とするファシズムは、条件次第ではどこにでも起こりうるものであるので、特殊化せずに見る」という考え方

亡命時に計画された『偏見の研究』(1950) において、(旧フランクフルト大学の) 社会研究所は、ナチズム (国家社会主義) とその犯罪の復活の前提として、人間の権威的性格の構造が一つの前提条件になると見なした。これらの研究を関連づけてアドルノは、権威主義的構造の破壊的傾向に対して、抵抗力ある個人を作るために彼は、反省に向けた教育・自律に向けた教育・迎合しない教育を支持した。こうした研究を出発点にして彼が「主体に向かっての転換」と名付けたように、自分の著書『否定的弁証法』(1966) で書いた「アウシュビッツを繰り返さないこと、類似の事件を起こさないこと」という前提を、彼は創ろうとした。

アドルノが『偏見の研究』の枠組みで導いた『権威主義的性格についての研究』は、ドイツ社会主義学生連盟 (SDS) 内部の反権威主義的な派閥が社会批判を行う基礎を形作った。

1940 年生まれのドゥチケ (Dutschke) は、1968 年に次のように論証した。つまり「我々のように、権威主義的社会で大人になった人間には、自分の性格構造を内部からこじ開けるチャンスが一度しかない。その時我々は自分がこの社会で『人間』として行動することを学ばなければならない。つまり我々はこの社会に属す人間であるのに、現存する権力・支配構造によって拒否される人間でもある」と述べた。その政治システムは変わったかもしれないが、ファシズムに導いたひとつの重要な構成要素―ドゥチケの前提でもある―が、まだ残されていた。それは権威主義的性格の構造であった。それを内部からこじ開けるためには、最大限に自律した人間に達するために「新しい人間を目指す教育」が有効であった。

永遠の学習過程としての反権威主義的行為

変えるべきは、個人の性格を形成する人格の構造及び制度の構造であった。つまりドゥチケがテーゼで言ったように、「ファシズムは一人の人間または一つの政党に於いて、より一層現れるのではなくて、むしろ権威主義的性格に向かう人間の日々の形成の中にある。つまり教育の中にある」のである。この点まではドゥチケの論証はアドルノの設定基準に沿うものであったが、ドゥチケが自分の分析から生み出した行動の原則は、先駆者アドルノのコンセプトの先を行った。

ドゥチケが述べたように、「独裁者や権威主義的支配構造に対する反抗を通して、個人は行動の中や行動を通して自分を変えるべき」である。個人の考えと態度を変えるために、アドルノは包括的教育改革を制度レベルで行う方向を目指した。他方ドゥチケの戦略は、反権威主義的行動を通して、制度の変更をあたかも「下から」設立しようとしたのだった。

「行動参加者の永遠の学習過程」として理解された反権威主義的行動は、『私の長征』において次の点で主要な要素とみなされた。その目的は「強い自我の瞬間」を引き出すために、かつ個人が将来にはシステム全体を追い落とすことができるという信念を強めるために。

反権威主義的行動という対処法は、独特の動員のダイナミズムを巻き起こした。何故かと言うとその行動は家族から大学の講義室、さらには裁判の法廷にまで及ぶ多数の団体で実行され得たからである。挑戦的活用に対する反応によると、挑戦者が正しいことが確認された。反応は証明

したかったものを暴露した。それは権威主義的制度に含まれた潜在的抑圧である。

この暴露は反構造の必要性及び連合（アソシエーション）と制度を再建する必要性を強調した。つまり共同体（コミューン）・（反権威的）幼稚園・反大学などではまったく違う関係形態を試すことが出来た。この方法で反制度を通して反権力を構築するという新左翼の変換戦略の主要な要素は、それがドイツ連邦共和国で過去の克服の特別な形を目指す「過去の処理」と結びついたことである。拒否や反画一主義ならびにオルタナティブな関係形態への発展を通して得られた個人と制度の自立が、行動の中心的理念になった。それは父親たちに対してよりも、むしろ父親たちをナチズムの共犯者・協力者・野次馬にした組織に向かう反構造理念であった。

反権威主義的行動の理論的含意が啓示していたのは次のことである。つまり責任問題の問題点を内省的に理解し習得することと同時に、行動を通して自己解放を試みるということである[5]。これにより現代社会の個人の行為と制度構造に対する反応と行為の枠組み変更を通して、まだ生きている過去として認識された過去から、人々は解放されるからである。

Hans J. Pepping　大阪府立大学
おおつとしお　神戸国際大学

[5] 訳者注：責任問題とはファシズムや戦争が誰の罪かという問題である。